



構成・取材・文／編集部
撮影／江藤太亮



京響 meets フレンチ・レストラン それはワインより、焼酎のような？

**想像以上の力を持つ
弦楽器の「音圧」は…**

例えば一般の高校において、部活として多く存在するのは吹奏楽である。入学式や卒業式において、彼らは校歌などの伴奏を行う場合がある。

これが音楽科のある高校では、音楽科の生徒がそれを担当したりする。彼らは専門的に「音の楽」を修める者であるから、「声楽を除けば」基本的に何かしらの楽器を専攻している。各々の専門楽器を持ち寄って演奏する。つまり、交響楽団＝オーケストラが出来上がるのである。

基本をおさらいしよう。「吹奏楽団」とは基本的にトランペットやトロンボーン、ホルンなどの金管楽器、フルート、サクソフーン、クラリネット、オーボエ、バスーンなどの木管楽器、そしてティンパニなどの打楽器からなる。高校レベルで多いのはこの吹奏楽団、つまり「プラスバンド」である。一方「交響楽団」には、ヴァイオリンやヴィオラ、チェロ、コントラバス、さらにはハープなどの弦楽器が加わる。この違いが大きい。弦楽器というと華奢な印象を持たれるかもしれないが、「音色」と「音圧」は別の話なのである。その差は生で聴かなければ、恐らく解らない。

**日本で唯一、自治体運営の
「京響」の団員の中には…**

「La Biche Ensemble (ラ・ビッシュ・アンサンブル)」という室内楽八重奏チームがある。8名中7名が、日本で唯一、自治体が運営する交響楽団であり、井上道義氏や小林研一郎氏など、超一流のコンダクターが歴代常任指揮者を務め、現在は大友直人氏が率いる「京都市交響楽団」に所属する楽団員である。彼らの平均年齢は30歳代であり、まだ若手の部類と言える。コントラバス担当の神吉(かんき) 正さん(まさと)は言う。「オーケストラに所属してはいませんが、もともと室内楽が好きで、メンバーも「アンサンブルをするなら誰と誰を呼んで」という選び方ではなく、「室内楽好き、集まれ〜!」と声をかけたら、自然とみんながワラワラ集まってきた感じで(笑)。以来、年1回の自主公演を行っている。もちろん一流のプロフェッショナルであることは間違いないのだが、若手故にステージの機会を欲していた。それ以上に、世界的に見てもクラシックのファン層は50歳代以上が多いと言われる現状であり、ファン層としてはパーセンテージの低い同世代のオーディエンスの前で演じる機会をこそ、欲していた。

京都でクラシック+フレンチ 有名なコンビネーションが…

その昔、「ルレ岡崎」というフレンチレストランが京都府会館近くにあった。後に北山に「京都コンサートホール」が完成し、京都府会館がロックやポップスのライブやコンサート中心の営業となったことで、「京都府会館でクラシックを聴いて、フレンチを食べる」という優雅な需要が激減してしまった。同店を運営する「スター食堂グループ」は、やむなく閉店を決断する。

だがさらなるチャンスは程なく訪れる。「京都コンサートホール」内にレストランを併設するという話が持ち上がった時、イの一番に声をかけられたのが同社だったのだ。それだけ「クラシック+ルレ岡崎」というコンビネーションは周知だったと言える。誘いに断れよう筈もなく、

そうして生まれたフレンチレストランが「ビストロラミュージズ」である。

「館」「店」「団」が 同じ事を考えてたら…

ただ、これも時流か、さらに北山という土地柄も手伝ったか、「クラシック」「フレンチレストラン」という言葉が、踏み出しにくい響きを持つようになった。どちらも「特別なもの」というパブリックイメージになったことは否めない。同施設内にホールとレストランがあるとは言え、それぞれは独自に営業するものであり、接点が存在しない状態でもあった。そうであるが、それぞれの需要が「コンサートありき」になるケースが多いという、少々捻れた状態である。

「レストランと何かできないか」「ホールと何かできないか」。お互いが常々そう考えていたところ、「エントランスホールを使ってミニ演奏会をしたい」と、ホールを預かる財団が京都市に掛け合った。「エントランスはパブリックスペースで、本来は営利目的で使つてはいけないんですね。それを承知でコンサートホールさんが市に掛け合ってくれた。結果『音楽が関わることであれば』という条件付きで許可をいただけました。我々としてはありがたいお話でした」とは、スター食堂グループの岡田部長の弁である。同時にこの決定は大英断だと言える。先の「La Biche Ensemble」の面々が、常々「エントランスでやりたいなあ」と思っていたのだから。

クラシックとて音楽 京響団員がジャムついたら…

「それぞれが別個に同じ事を考えていた」という意味では偶発的だが、もはやこれは必然と言つても良いだろう。このような経緯で実現したのが、「Matinee」という演奏会である。奏者8名に対して観客は80名まで。場所が場所だけに双方の距離も近く、小規模だからこそ奏者の表情まで読みとれる。「指揮者がいませんから、奏者同士のアイコンタクトがあるんですね。ジャズで言うジャムセッションのようなつもり



『欲しい』と思うより『どう使う』をたずねて下さい。

コミュニケーションと
もっと幅広い
ケータイライフを
提供するドコモショップ

例えば、

トラブル相談

① 迷惑メールなどのトラブル相談

診断チェック

② 料金プランの診断チェック

アフターサービス

③ ケータイの故障も安心受付

マイショップ

④ 当店の会員様だけの特別サービス

カフェサロン

⑤ ドリンクサービス

新機種がお求めやすいお値段に



開催中!

4月末まで

NTT
Do Co Mo

ドコモショップ四條堀町店

京都市下京区四條通堀町西入る

TEL(075)257-4000

年中無休

営業時間 10:00~20:00

大丸

高倉通

四條通

ルイ・ヴィトン

UFJ

HERE



でやっていますからアドリブもあるんですよ。誰かがリハーサルと違うことをやると『あ、やりよった』と(笑)。すると他の者は『ちょっと待て』という顔をしたり、『ついて行くわ』という顔をしたり(笑)。言葉は悪いけれども、遊んでいる部分もありますから、そういう表情は通常のオーケストラではなかなか見られませんが、見られたとしてもホールでは距離が近いので解りづらいでしょうね。そういう意味で小規模ならではの楽しみ方をしていただけだと思います」と神吉さん。さらに通常のクラシックコンサートで指揮者が一曲ずつ説明を行うようなことはないが、メンバーの最年長であるバースン担当の仙崎さんが、巧みな話術で作曲家にまつわるエピソードなどを曲間に説明する。こ



La Biche Ensemble Matinée III

05年3月15日(火)
演奏会 11:30~12:30
@1F エントランスホール
会食会 12:45~14:30
@ピストロ ラミューズ

【予約・問い合わせ】
京都コンサートホール内
ピストロ ラミューズ
TEL:075-712-2310

La Biche Ensemble (ラ・ビッシュ・アンサンブル)

ヴァイオリン・田村安祐美、ヴァイオリン・片山千津子、ヴィオラ・高村明代、チェロ・渡辺正和、コントラバス・神吉正、クラリネット・鈴木祐子、バスーン・仙崎和男、ホルン・小椋順二によるアンサンブル。ソリストとして活躍する田村さん以外は、全て京都市交響楽団の団員で、それぞれが室内楽を好み、自然発生的に誕生した八重奏チームである。今回紹介する「Matinée」の他にも自主公演を行っており、バスーンとチェロによる二重奏や、クラリネット・チェロ・コントラバス・バスーン・ホルンによる五重奏など、二重奏から八重奏まで、8人の自由な組み合わせによる実験的かつユニークな演奏も精力的に行っている。

自主公演予定

4月10日(日) / 厄嶋ピッコロシアター小ホール 開演14:00~

4月18日(月) / 京都市北文化会館 開演19:00~

問い合わせ La Biche Ensemble
(TEL:090-1229-1565)

うなると立派なMCである。
エントランスのひとときで
敷居や垣根を越えていく。
午前中から昼過ぎまで演奏を聴き、その後レストランでメンバーと一緒にランチを楽しむというこの演奏会+食事会。それは「クラシック」「フレンチレストラン」という言葉が生む「遠いもの」というイメージを埋めるものとなった。しかも、ここで改めて確認するが奏者は「京響」の団員である。一流である。
クラシックとは言っても、結局はポップスやロックと同じ音楽だ。神吉さんは続ける。「美味しさが頭に残って、『また食べに行きたいな』と思うものつてありますよね。それは10年前に

食べたものでも、ラーメンでもタコ焼きでも何でも良いんです。そういう風に『また聴きに行きたいな』と感じてもらえれば嬉しいですね。ちなみに「La Biche Ensemble」の「Biche(ビッシュ)」とは、仏語で「愛らしい」「親しまれる」という意味があるのだが、これは実は後付けで、「メンバーの共通点を探すとみんなお酒好きなんです。で、『美酒』(笑)。漢字ついでというも何ですか、検査エンジンで探してみると仏語に良い意味が引っかかったのです(笑)。京響を高級ワインに例えるなら、そういうですね。私たちのアンサンブルは焼酎梅入りという感じでしょうか(笑)。」
つまるところ、この言葉が最も敷居や垣根を取っ払ってくれるのかもしれない。